

国立公園の森林

生態系

エゾマツやトドマツのような針葉樹が、阿寒摩周国立公園の森林の約 70%を占めています。残りの 30%は、ミズナラ、ハルニレ、シナノキ、イタヤカエデのような広葉樹です。植物が独特に混合していることで、野生生物には豊富な食べ物と様々な生息場所があります。森には、エゾシカ、ヒグマ、エゾモモンガ、クマゲラ、アイヌキンオサムシという多色の虫、その他、北海道特有の多くの野生動物が生息しています。

火山活動による影響

長年に渡る火山活動のため、林床の酸度は様々です。噴火の後にアカエゾマツが酸性土壌で育ち、その結果土壌が中性化します。これにより、さまざまな植物も育つことができます。広葉樹が林床に落葉することでできる腐葉土は、地面を肥やし、種が育つのを助けます。さらに、針葉樹が林床に倒れ、腐敗すると、それを養分にして苔が生え、湿潤な環境を作ります。

雄阿寒岳の山麓に広がる森は、主にトドマツ、エゾマツで構成されています。雌阿寒岳には、アカエゾマツ群落があります。摩周カルデラや西別岳周辺の地域では、ダケカンバのみが生える森もあります。このように同じ国立公園内でも森林を構成する樹種は様々であり、それに伴い、下層植生やそこで生きる動物種も様々です。